

倭国の故郷を訪ねて 「韓国史跡めぐり」旅行記

東京古田会ニュース№109 JUL 2006 掲載分

平松 健

旅行期間 二〇〇六年 五月

参加人員藤沢会長以下二〇名。

はじめに

旅をするには何も先入観を持たずに、見るもの知るものに感動を覚えるのも楽しいことであるが、最近は仮説を持って旅行して、それを確認する方が記憶力の衰えてくる老人には効率的だということに気がついてきた。そこで今回は勝手に次のような仮説をたてた。それは、韓国人は絶対に認めようとしないう「半島における倭国の存在」である。古田先生の説ではおよそ以下のような理由で倭国の一部が朝鮮半島にあったことになると思われる。(多分に小生自己流の牽強附会あり)

一 魏志東夷伝では、「韓は帯方の南にあり、東西は海をもって限りとし、南は倭と接す」となっている。これは半島に倭の一部があることであり、もし、倭がなくて海に面していたら南も海をもって限りとする表現するはずである。

二 同じく東夷伝倭人の項で「(帯方)郡より倭に至るには海岸をめぐり水行し、韓国をへてあるいは南あるいは東にゆけば、(倭国の)北岸の狗邪韓国に至る」とある。ここでは狗邪韓国は倭国の一部とされている。

三 好太王碑に「倭人その国境に満ち、城池を潰破し、奴客をもって民となす。王に帰し、命を請わん」とあり、国境と言うからには倭の領土が半島にあるということである。

四 三国史記新羅本記には「倭人のしばしば疆場(きょうえき)を犯すをもって辺によりて二城を築く」とあり、新羅と国境を接していたことがうかがわれる。BC五〇年の項には、倭人が兵を率いてやってきた、BC二〇年の項には、瓠公はもと倭人であること、四代脱解王は卵から生まれたが、最初に着いた国は金官国であり、瓠公の持っていた領地を取り上げたことや、五八年には瓠公を大輔にしたことは、倭の領土が半島に存在することを前提とした記事であり、五九年には倭国との友好関係を結ぶとあるが、これも半島に領土があることが前提である。

五 宋書夷蛮 倭国の項(伝)に(文章は他の王と若干異なるが)「詔して武を使持節都督倭・新羅・任那・加羅・秦韓・慕韓六国諸軍司、安東大將軍、倭王に除す」とあり、任那・加羅が出てくる。なお同書では倭国の他、当地域では高句麗、百濟が出てくるだけであり、それぞれ征東將軍、鎮東將軍(倭国は安東將軍)に除している。このことは、当時は新羅が倭に属していたと考えてもおかしくない記事である。ただし日本書紀では新羅を黄金の国などと独立性を認めており、九州王朝との関係で考察する必要がある。

六 翰苑(唐、張楚金撰)に「加羅・任那は昔新羅のために滅ぼすところとなる。それ故今並びに国の南七、八百里にあり」とある。

七 継体天皇の六年には任那の四県、更に七年には二県を百濟に譲渡している。領土を持っ

ていたことが前提である。

八 考古学的には中広矛・広矛・中広戈・広戈が洛東江流域に分布していること（銅矛銅戈の鋳型出土が九州から出る）、縄文時代から腰岳（佐賀県）の黒曜石が釜山近辺に出土していること、等であろう。石槨構造、埴輪 円筒土器についても重要な証拠であるが、なお研究したい。

九 時期については日本書紀欽明記にも五六二年までとあり（新羅に滅ぼされた）、翰范の話とも一致する。

歴史

もう一つ、旅行するにはその土地の地理はともかく、簡単にその歴史を見ておく必要があると思う。

弁韓 紀元前一〇八年、古朝鮮(衛満朝鮮)が滅亡したときに、韓国の南部地方には馬韓・辰韓・弁韓という政治体があり、紀元後三〇〇年まで持続した。弁韓の主要国は狗邪国・安邪国・古自国・半路国で、それぞれ金海・咸安・固城・高霊地域に位置したという。これらは後に、金官加耶・阿羅加耶・小加耶・大加耶に成長・発展した。

加耶 加耶は、紀元後三〇〇年ごろに弁韓を基盤として成立した複数の勢力集団で、「伽椰」・「加羅」・「加良」・「駕洛」・「任那」などと表記されたりもした。加耶という名前は、「狗邪」から来る。加耶は、時期によって五加耶・六加耶・加耶七国・浦上八国・任那十国などの形で集まったが、統一国家になれないまま、五六二年、大加耶を最後として全て新羅に併合された。なおハングルでは加羅も加耶もカヤと発音する。

新羅 新羅は紀元前五七年に始祖が王位（居西干）についたとされる。新羅王の建国伝説は卵生神話であり、始祖は卵から産まれたとなっている。四代目王である脱解も卵生神話であり、倭国東北一千里の多婆那国の出身とされている。日本側伝承では、新羅王の祖は鵜草葺不合命の子稲飯命（神武天皇の兄）だと「新撰姓氏録」にある。武烈王の即位(六五四年)以降国力を増し五六〇年代には高句麗を攻撃し北に領土を広げ、百済・日本の連合軍を退け、倭人国加羅を征服した。唐と結んだ新羅は唐の援軍と共に金庾信に軍を率いさせ、百済に進軍。六六〇年に百済を滅ぼし、六六三年に白村江にて日本を破り、六六八年に高句麗を滅亡させた。六七六年に唐軍を半島から追い出し、朝鮮半島をほぼ統一した。

百済 百済は、もともとは高句麗の王族の一派から派生したとされ、三国史記によれば前一八八年高句麗の王族が現在のソウル付近に建国したとある。四世紀頃から盛んになったが、高句麗広開土王等を押され、四七五年には漢城は陥落し、熊津へ遷都、更に五三八年には泗沘に遷都した。南遷した百済は全羅南道の馬韓を制圧し、仏教文化が栄えた。六六〇年、唐の蘇定方将軍が百済王都を占領し、後に唐は百済に都督府を設置して直接支配を図る。やがて唐本国から劉仁軌の率いる唐の増援軍が到着し、倭国の水軍と白村江で戦い、百済の滅亡、倭国軍の大敗となる。

高句麗 三国史記によれば、高句麗は紀元前三七年に朱蒙により立てられたとされる。三九

一年に即位した一九代広開土王は後燕と戦い遼東に勢力を伸ばし、南に百済を討った。その後、百済が倭と結んで新羅を攻めたので援軍を送り、倭を追い返して新羅を朝貢国にした。広開土王の後も高句麗の伸長は続き、長寿王は平壤城に遷都した。その後百済と結んで新羅を攻めるが、新羅は唐に助けを求め、六六八年に高句麗は滅んだ。

五月九日（二〇〇六年）

準備万端とはいえないが、いよいよ韓国へ

成田空港一時五五分集合、一三時五五分発KE七四便。格好をつけてハングル紙をもらう。韓国の出生率が一・〇八人になったと言うことが東亜日報に大きく報じられていた。日本の一・二九人よりかなり低い。それでも日本ほど深刻に受けとめられていないのは、このまま行っても二〇一七年までは人口が減らないことにあるらしい。減らないのは日本に比して結婚適齢期の男女の人口比率が高いことにあるという。

釜山着一六時五分。コモドホテルに着いて、一息ついてから食事は海鮮鍋。日本人向けに甘口にしている。飲物に百歳酒というのがある。これを飲めば親よりも若返るという。高級なものは千歳酒という。

ガイドさん

金美京さん。非常に研究熱心で好感が持てる。たまに解らない言葉があるが、韓国人がしゃべる日本語を聞くコツは、パ行はバ行に、ヤ行はラ行に、ダ行はタ行に置き換えれば大体理解できる。もっともハングルにはフ、チ、ツ等の発音がない。ハングルは最も合理的な言葉として文化遺産に登録されているそうだが、書いたとおりに読まないのは日本の旧仮名遣いと同じだ。

ハングルでは世界中の言葉が表記できるなどと言うがそれはあり得ない。日本語のフチツがないのは良いとしても、中国語の発音はほとんど表記できない。余談ながら漢字が韓国人王仁を経由して日本に入ったことは、音韻上では二重のスクリーンにかかったことになり、当初から漢字の正しい発音は輸入されなかったことになる。ただし橋本進吉説によれば、直接輸入されていたとしても、日本語にない発音は輸入されなかったであろう。

五月十日

朝から雨が降っていた。以下訪問先順に要旨を記載する。

首露王陵

駕洛国（金官伽耶）始祖首露王の陵、西暦一九九に造立したとされる。高さ六米、直径二二米のこじんまりしたもの。首露王は西暦四二年（六〇年早めてBC一八年とする説もある）に駕洛国（金官伽耶）を建国し、朝鮮半島の南部にあった六つの小国を形成した。鉄の製造が盛んだったと言われ、伽耶時代の古墳からは鉄製品の副葬品が多く出土し、同時代の日本の古墳からも同型の鉄製品が出土している。首露王は西暦四二年に建国してから一五八年間王位にいたことになっている。第二代の王も五五年間王位にあり、二倍年歴を適用しても

期間的には問題がある。むしろ更に六〇年ずらせた方が、信憑性が増すかも知れない。（三国史記には西暦一〇二年の項に首露王が仲裁した話が出てくる）。

首露王の誕生は、「亀旨峰（クジボン）」という山に六つの金の卵が空から降りてきて、卵から生まれた王たちはそれぞれ六伽耶の王になり、その一番最初に生まれたのが、この首露王であると「三国遺事」にある。古事記の中にでてくるクシフルダケが亀旨峰ではないかと考える学者もいる。また首露王の王女の一人が卑弥呼になったという伝説も残されている。

王妃陵

首露王の王妃はインドの阿踰陀国からやって来たとされている。首露王陵内の正門の神魚像は、インドとの文化交流や王妃の出身を立証するといわれる。

大成洞古墳群

ここから金官加耶のあった場所が見える。そこから貝塚も発見されていて、海が近かったことが解る。現在の海岸線からはかなり離れている。ここから亀旨峰も見える。手前のマンションが大きいからか、峰と言うにはいかにも低く見えるが、亀の甲だと思えば納得できる高さである。

大成洞古墳博物館

発掘した墳墓の上にドームを建てている。四世紀に作られた墓の部分が、一部三世紀の墓を破壊している。炭素年代測定はしてない。土器の形などによる年代測定、いわゆる土器編年で考えている。大成洞古墳群から発掘された墓は合計一八四基で、支石墓、甕棺墓、木棺墓、木槨墓、竪穴式石槨墓、横穴式石室墓が発掘された。丘陵周辺の平地には一三世紀の木棺墓と木槨墓が、丘陵地帯には四世紀の木槨墓が集中している。また鉄器遺物が大量に出土している。和泉の黄金塚から出たものとはほぼ同型の銅器も出たという。帰国後黄金塚古墳の出土品のリストを点検したが、銅器については有名な景初三年銘の画文帯神獸鏡を含む三面（島根の神原神社古墳からは景初三年銘の三角縁神獸鏡）の他は記録されていない。一方博物館には銅鏡の他、銅鼎、銅?等が展示されており、どの銅器のことか確認しなかったのは誠に残念であった。

金庚信將軍の墓

金庚信將軍は百濟・高句麗を滅ぼし三国統一を成し遂げた天下の名将と称えられている。王にはなっていないが王の陵より立派である。墓が東面しているのは太陽崇拜の現れである。將軍墓は十二支神像を彫った護石で囲まれている。

古墳公園（大陵苑）

ヒトツバダゴが見事に花を咲かせていた。ハングルではイパムナムという。日本では別名「なんじゃもんじゃ」。もつとも「なんじゃもんじゃ」は解らない木の花を呼んでいるようだが、明治神宮にあるものは確かにヒトツバダゴである。大陸系もくせい科落葉高木で対馬鰐浦では五月には三〇〇〇本以上が開花する。日本では対馬の他に木曽川流域で自生している。もともと大邱が原産地で大邱市南区の区木に指定されている。

天馬塚

大陵苑の中でもっとも有名な古墳。天馬塚という名前は、この古墳から天馬を描いた馬の泥よけが出土したことに由来する。天馬図と呼ばれるこの泥よけは白樺の皮で作られており、翼の生えた白馬がたてがみを風になびかせて空を翔ける姿が描かれている。二二代智証王の墓である。この中から数十個の鶏卵が出土（化石化している）。始祖の卵生神がこの頃からすでにあったことを伝えている。天馬塚からはそのほかにも金冠、腰帯、ガラス器など一万一五〇〇点余りが発掘された。

味鄒王陵（新羅一三代）

韓国の墓は丸い石で積み重ねて作るため盗掘がし難く、この王陵も一〇〇%保存されていた。「三国史記」に「味鄒王は大陵に葬られた」とあり、それが大陵苑の由来となった。

武烈王陵

武烈王は金庚信將軍の協力を得て各地の勢力を結集した。六六〇年には唐と連合して百濟を滅ぼした。統一新羅の基礎を築いた。新羅王陵としては珍しく王名のはっきりしたものである。入口に亀をかたどった台座がある（亀趺）。太宗武烈王陵の後ろに四基の古墳が並んでいる（西岳洞古墳群）。

国立慶州博物館

慶州地域の発掘調査によって出土した多くの出土品を展示している。古墳室の金冠が最大の見物。この金冠は路東洞・路西洞古墳公園の中にある瑞鳳塚から出土したもの。美しい鳳凰の装飾が見事。金冠塚から出土した冠も見事。

美術館には寺院址から出土した文化財や仏像などを集めている。ひとつは栢栗寺の本尊として奉られていた金銅薬師如来立像。統一新羅時代に作られた金銅仏像としては最大のもので、仏国寺にある金銅毘盧遮那仏座像、金銅阿弥陀如来座像とともに統一新羅三大金銅仏として知られている。

雁鴨池館には、九三五年の新羅滅亡によって雁鴨池に放り込まれたものが発掘されて展示されている。

聖徳大王神鐘（エミレー鐘）

韓国では地面すれすれの所に鐘をつるし、下を少し掘り下げている。最初は法徳寺にあったもので、法徳寺鐘とも呼ばれる。貧しい母が娘を寄付したときに娘が「エミレ（お母さん）」と泣き叫んだことから、この鐘は別名エミレの鐘と呼ばれている。完成後も鐘を打つとエミレと響いたという。

五月十一日

仏国寺

吐含山の中腹に位置する仏国寺は、韓国を代表する寺院。創建の時期はさまざまな説があるが、五二八年に法興王の母、迎帝夫人の発願によって建設されたという記録が「仏国寺古今創記」に出ている。文禄・慶長の役で大半の建物が焼失してした。現在見ることのできる仏国寺の姿は大半一九七三年以降に復元されたもの。余談だが仏国寺の庭で、大人も一緒にな

って**独楽（こま）で遊んでいた**。こまの起源はここにあるのかも知れない。

紫霞門と安養門を泛影楼がつなぐ姿は、新羅建築の雄大さを感じさせる。大雄殿の中には本尊である釈迦牟尼像が置かれ、その両脇には文殊菩薩、普賢菩薩の像が並んでいる。大雄殿の前にある大きな二つの塔は多宝塔と釈迦塔である。極楽殿には阿弥陀如来の像が安置されている。毘盧殿の中には本尊として金銅毘盧遮那仏座像が置かれている。毘盧遮那仏は華嚴経の教主で太陽、光明の象徴とされている。日本では東大寺の大仏と同じ仏様だ。

毘盧殿の脇には建物に囲まれた舍利塔がある。高麗時代初期に建てられたものと推定され、一九〇五年に一時日本に持ち出され、料亭の前に飾ってあったが一九三三年に返還され現在の位置に置かれている。

青磁工場

仏国寺のすぐ近くの青磁工場を見学。製造過程、登り窯など見学。ついつい高い土産物を買わされる羽目になる。

雁鴨池

雁鴨池が建設は六七四年。百濟、高句麗を滅ぼし、領土を広げる過程で手に入れた多くの財産を費やして建設された。現在は三つの建物が復元されている。九三五年の新羅滅亡によって宮殿も破壊され、美術品などもすべて池に放り込まれた。

カチ（鵲）

雁鴨池前の公園でも、後から訪問した景福宮でも群がって鵲が遊んでいるのを見かけた。韓国では国鳥とされ、吉鳥として、カチを見るとその日に良いことがあるとされる。日本には佐賀平野だけに生息し、一説では秀吉の軍が持ち帰ったという。もっとも推古六年には難波吉士盤金新羅より至りて鵲二隻を獻る、とある。秀吉より前だか、いずれにせよ韓国からになる。源氏物語にも新古今和歌集にも鵲が出てくるが陰暦七月七日に牽牛星と織女星を会わせるために鵲が翼を並べて天の川に渡すという想像上の天上の橋が前提になっているから、中国はともかく日本に鵲がいたという証拠にはならない。

月城

三世紀頃の斯盧国時代から九三五年の新羅滅亡まで王城があったとされる。新羅四代王脱解（タルヘ）が瓠公を騙して取り上げた場所。瓠公は倭人である。三国史記では五〇五年石氷庫を作ったあり、月城の一角に再現している。

国立大邱博物館

当博物館が開館したのは一九九四年である。

考古室では新石器時代・青銅器時代・鉄器時代をへて三国時代にいたるまでを展示している。灰色土器 登り窯を利用して以前の無文土器より高い温度で灰色土器を焼成する。灰色土器はこの時期に集中的に発見され、硬いものの表面がちょうど瓦の材質に似ており、これを瓦質土器と呼ぶこともある。ちなみに「すえ」とは**ハングルで鉄の意味**であり、須恵器とは鉄のように堅い土器という意味になる。

木で作った下駄（ボクリという）が展示されている。日本語のぽっくりの語源であろう。

新羅の墳墓の内部から華麗な金冠など多くの遺物が出土する。

伽耶の墳墓の代表的なものは石槨墓である。規模が大きな古墳は主人公が埋葬される主槨と副葬品を納める副槨がつくられている。出土遺物は土器をはじめとして、金銅冠・冠飾り・各種装身具・武器類・馬具類などがある。

冠帽 新羅の冠帽はシベリアのシャーマンが使用した冠帽と似ており、北方文化との関連性をしめす。伽耶は高靈出土の金冠を除いては、大部分金銅冠で草花形立飾や鳥形装飾が基本であるが、新羅が伽耶地域に勢力を拡張する五世紀後半以後には新羅特有の出字形立飾が付いた金銅冠が出土する。

五月十二日

池山洞古墳・大伽耶博物館

褐色土器がある。岡山と関係あるという。そういえば月輪古墳の円筒形埴輪を連想させる。大きな宿題を貰った。

説明の途中でボランティアガイドの方が、植民地時代に日本人で大邱に電機会社を起こした人が、七〇回も大きな鞆を持ってきて詰め込み持ち帰ったという話があって、非常に気まぐずい思いをした。その人がどういう人かは知らないということで、帰国後調査していたらそれらしい人にぶつかった。大邱電機創業者高島菊次郎氏（一八七五～一九六九）ではないかと思われる。高島氏は東京国立博物館に韓国の出土品を大量に寄贈しているとある。

良田里岩刻画

良田里の岩刻画は高さ三米、幅 六米ぐらいの山の崖に刻まれている。青銅器時代後期(BC 三〇〇～〇)の岩刻画と推定される。

稲作

良田から思い出したのは稲作の話。博物館によって韓国に稲作が始まったのは紀元前四世紀となっていてところと、紀元前一〇～四世紀（大伽耶博物館）となっていてがある。紀元前四世紀というのは今までの通説だったのであろう。ところが歴博の炭素一四年代測定から日本ではBC九三〇年頃まで遡るという話になり、当然韓国の方もそれに遅れることはない判断した節がある。

問題は**田**という字である。中国は当然水田を表し、日本は水田の意味で田の字を輸入した。一方韓国では田は焼き畑を意味し、ハングルで畑のことをパットゥといい、日本語の「はた」の語源となっている。韓国では稲を水田で作るようになって水の下に田と一字で書く漢字を作った。もちろん中国にも日本にもない漢字である。一方日本ではもともと水田として田を輸入したが、焼き畑もあって、日本独自の畑という字を作った。

翰苑には馬韓にだけ稲を植えることを書いてあり、他の地域には出てこない。日本には山東半島を経由して稲作が伝わったというのは大勢のようであるが、朝鮮半島を経由してか否かについてはまだ議論の余地がありそうである。

海印寺

海印寺は韓国三宝寺刹の一つ。八〇二年に順応と利貞の二人の僧によって創建された寺院。

「海印」とは“波の動きもない海に、万物の形象がそのまま映るように、煩惱が消えた心には万物の真理もそのまま現れる”という意味の華嚴經の海印三昧から引用しているという。

八万大藏經 海印寺が法宝寺刹と呼ばれるのは八万大藏經が収蔵されているためである。八万大藏經は、蒙古の侵略に対して仏様の力を借りて、国難克服を祈願する意味で一三三六年から一六六一年間にかけて完成したものである。

総数八万一二五八枚という膨大な量の版木が保管されている。版木のすべては南海や巨済島など、島の地方からとった白樺の木を三年間海水につけ乾燥させ引き締めた状態に彫り、さらに漆を塗って作っている。

景福宮

景福宮は一三九五創建された李氏朝鮮の正宮。朝鮮を建国した李成桂が高麗の首都である開京（開城）から首都を漢陽（ソウル）に移す過程で造られた宮殿。一五九二年豊臣秀吉による文禄・慶長の役の戦火によって全焼するという悲運に見舞われ、二七三年間、再建されなかった。しかし一八六五年興宣大院君が再建に着手し、一八六八年に創建当時の規模に復元。同年七月には高宗が昌徳宮からこの地に王宮を移した。一九一〇年、日韓併合によって景福宮の景観は完全に破壊された。二〇二五年までに一八六八年当時の姿に再現する予定だという。

光化門、興礼門、永濟橋、維和門、勤政門、勤政殿、資善堂、丕賢閣、万春殿、思政殿、千秋殿、修政殿、慶会楼、慶成殿、康寧殿、延生殿、交泰殿、欽慶閣、含元殿、慈慶殿、緝敬堂、咸和堂と見学したが、ここも詳しく見れば一日では足りない。

南大門

韓国国宝第一号。南大門はソウルの城郭の正面にあり、正式な名前は崇礼門。朝鮮太祖七年（一三九八）に創建された後、世宗三〇年（一四四八）に大改築された。都城の南側にあったということで南大門と呼ばれたと言う。韓国に現存する木造建築物の中で最古という。

李舜臣(イ・スンシン)将軍像

景福宮をバックに、大きな刀剣を握って仁王立ちで構えているのが李舜臣将軍の銅像である。李舜臣将軍は、秀吉の文禄・慶長の役で亀甲船を建造し、日本水軍を撃破して、ついに朝鮮から撤退させた将軍。

五月十三日

夢村土城

ソウルの新都心江南地区に「三国史記」にいう百済初期の都「漢城」の中心都城「河南慰禮城」とみられる夢村土城がある。一九八八年に開催されたソウルオリンピックのメイン会場だったところである。南北最大七三〇米、東西最大五四〇米、最大比高二五米の楕円状をなしている。これまでに版築城壁、土墳墓、甕棺墓、竪穴住居址、地上建物址、貯蔵坑、積石遺構、蓮池遺構等と多量の遺物が確認されている。五世紀前葉からの遺構が確認されている

が、遺構以外で四世紀に遡るべき遺物もある。

石村洞 積石塚

かつてはこの付近に一〇〇基を越える古墳があったとされるが現在は一辺約五〇米の正方形の三段積石塚として五号墳まで復元されている。立て札のハングルの説明では円筒形土器が出土して三世紀の日本との交流関係あったとしているが、英語の説明には載っていない。時期については百済初期、四世紀初頭と説明ではなっている。なお管理人の女性が二号墳は上円下方墳であることに注意せよと大きな声で叫んでいた。

岩寺先史住居址

岩寺先史住居址は韓国の櫛文土器時代の代表的な遺跡地。B C 三, 〇〇〇～四, 〇〇〇年頃の新石器時代の集落が残っている。遺物の一部は放射性炭素年代測定の結果、B C 三, 〇〇〇年のものだということが判明し、新石器から金属器時代の土器ということが明らかになった。

国立中央博物館

この博物館では先史時代から近代二〇世紀に至るまでの朝鮮半島の歴史を、一度に見ることができる。その規模は、世界第六位といわれる。館内は一階の考古館・歴史館、二階の美術館Ⅰ・寄贈館、三階の美術館Ⅱ・アジア館の六つのセクションから成り立っている。

全部見るわけにはいかないのでポイントをつけるとまず半跏思惟像であろう。中央博物館の解説文によると「もともとこのような姿態はシッダルタ太子が出家する以前に人生の無常を思惟した時分の面立ちで中国では太子思惟像と言っていた像だが、この像が流行してから半跏思惟像と呼ばれるようになった。北魏時代以来単独像または交脚弥勒菩薩の脇侍像として流行したが、韓国では三国時代末期(六～七世紀)と統一新羅時代初期にかけて半跏思惟像の形式が完成して多くの名品が残っている。その代表的な例が国宝八三号の金銅半跏思惟像で仏教の深遠な哲理を思惟し神秘的微笑をただよわす面ざしが優れた鑄造技術を通じて美しく表現されている。このような半跏思惟像は日本の飛鳥白鳳時代と影響を与えて広隆寺や中宮寺の半跏思惟像などが伝えられている」。

問題の広隆寺の解説によれば、「弥勒菩薩について」で、まずカール・ヤスパース(独・実存哲学者)の言葉を引用して「(前略)古代ギリシャの神々には(中略)まだ完全に超克されきっていない地上的人間的なものの臭が残っていました。(中略)然るに、この広隆寺の弥勒像には、真に完成され切った人間実存の最高の理念が、あますところなく表現され尽している。(後略)」。

広隆寺自体の解説では、中央博物館と酷似している弥勒菩薩半跏思惟像について「我が国で最も古く最も美しいこの弥勒像は、いかなる言葉も無視し、いかなる言葉も届かぬ所で永遠の微笑を続けている。(中略)用材は赤松であり、製作は飛鳥時代であるが、この時代の彫刻でこれ程人間的なものはないと同時に、人間の純化がこれ程神的なものに近づいていることも他に類をみない」としている。

別物の「弥勒菩薩半跏思惟像国宝」について、「百済国からの貢献仏で、先の弥勒像と同じ

飛鳥時代の作であるが、本像は眼が大きく切れが長く伏目で、口許を引きしめているから、べそをかいている様に見え『泣き弥勒』とも呼ばれる」とある。

何日あっても足りないといわれるほどの展示品を駆け足で見て回った内で、日本の弥生土器とか埴輪が古墳から出てきたのを見たのは印象深かったが、とりわけ考古館の中にある、平壤長白里二四号墳から出た銅鏡（二世紀の物とされている）は、韓国の唯一の三角縁銅鏡といえる物ではないかと、頭の中が真っ白になるほどの興奮を覚えた。

おわりに

四つの都市を中心に駆け足で廻って、結局当初の仮説は何も証明されないままに終わった。結局振り出しに戻って、何度行っても、新しい発見が色々あり、そのたびごとに良い思い出を作るのもまた楽しい旅行の方法だと思いながら、たそがれの韓国を後にした。

（了）